

米国大学の日本語授業のビジターセッションにおける 言語レパートリーの分析

—学習者と日本人学生の英語使用とスタイルシフトに着目して—

大場 美和子（昭和女子大学）

山本 綾（東洋大学）

要旨

本研究の目的は、日本における米国大学の日本語授業のビジターセッションにおける言語レパートリーの実態を、中上級学習者 8 名と日本人学生 12 名による(1)英語使用と(2)日本語のスタイルシフトから探ることである。分析対象は、90 分のセッション中の小グループによる 7 つの談話である。(1)(2)の分析の結果、(1)は、基本的に研究発表と質疑応答は日本語であるが、雑談では英語がより多く使用されていた。(2)は、研究発表はデス・マス体が中心であるが、質疑応答や雑談でダ体や中途終了へのシフトがより多く見られた。学習者と日本人学生は、発話の宛先、話題、親しみ、談話の種類、言語運用能力などに応じて(1)(2)を行っており、その柔軟な言語レパートリーの活用は、トランスランゲージングとして捉えられることを指摘した。

【キーワード】 英語使用，スタイルシフト，言語レパートリー

Keywords: English usage, style shifting in Japanese, language repertoire

1 研究の目的

昭和女子大学とテンプル大学ジャパンキャンパス（TJU）は日米の大学が物理的に隣接し、両校の学生の交流が推進されている。ある TJU の日本語授業ではビジターとして日本人学生を招き、学習者が各自の研究課題を発表してビジターと意見交換をしている。そこでの学習者とビジターの会話は日本語かつデス・マス体が基調であるが、英語やダ体の使用も観察される。この言語やスタイルのシフトは流動的で、柔軟に使い分けられているように観察

された。この流動性や柔軟性を捉えるには、コードスイッチングやスタイルシフト等の個別の分析ではなく、参加者の言語レパートリーとして総合的に分析する視点が求められると考える。そこで、本研究では、日本における米国大学 TUJ の日本語授業を対象に、ビジターセッションでの言語レパートリーの実態を、学習者及び日本人学生の英語使用とスタイルシフトに着目して明らかにする。交流活動での言語使用の実態を総合的に見ることで、今後のビジターセッションを含めた多様な交流活動の指導の検討を目指す。

2 先行研究

2.1 言語レパートリー

言語レパートリーとは、“the totality of linguistic forms regularly employed in the course of socially significant interaction” (Gumperz 1964:137), すなわち「社会の相互行為のなかでつねに利用される言語形式の総体」(村岡 2020:53) で、個人が文脈や社会的な違いを反映した形で持ち合わせている「語彙や文法、談話的側面などの全ての要素 (language features)」(酒井 2022:9) が含まれる。近年、多言語・多文化共生社会の下、「多様な言語リソースを多様なスタイルで利用する」(村岡 2020:54) 当事者に着目して言語レパートリーを捉え直す動きが出ている。この考えの1つが、トランスランゲージング (TL) へとつながる。TL とは、複数の言語を使用して意味を生成し、経験を形成し、理解と知識を得るプロセス (Baker 2011; 佐野 2024) であり、「会話全体のプロセス」に重きを置きつつ (Tsou 2021:10-11), コミュニケーションの場で手持ちの言語レパートリーやツールを動的・一体的に駆使できるようにする能力である (Canagarajah 2011; Li 2022)。

上記の考え方は、教育的視点や社会言語学的視点の研究に応用されている。抽冬 (2020) は、日本の大学のグローバル教育において、参加者 (日本, アメリカ, タイ, インドネシア) の英語によるディスカッションに着目している。日本語非母語話者の留学生が、英語を補完する際に、参加者に共通して理解可能な言語レパートリーの日本語を使用して、TL を行ったとしている。つまり、ディスカッションの遂行にコミュニケーション能力として

TL が機能しており，目標言語の習得とその場におけるコミュニケーション能力の相互的効果を検討する必要があると指摘している。

本研究では，日本における米国大学である TUJ の日本語授業を対象としており，学習者の目標言語は日本語であるが，ビジターの日本人学生との間で共通する言語レパートリーは英語と日本語となる。その日本語では，デス・マス体とダ体というスタイルの選択もレパートリーとして捉えられる。

2.2 英語使用とスタイルシフト

日本語の会話では外来語が出現しても，通常は日本語の発音システムでいわゆる日本語的に発音される場合が多いが，英語的な発音で発話される場合もある。細田（2008）は，日本語母語話者同士，日本語と英語の母語話者による友人・知人間の日本語の自由会話を対象に，カタカナ英語の使用・不使用が引き起こす修復の連鎖に着目している。細田（2008:148）は，「カタカナ英語」を日本語の発音システムに置き換えられた英語と外来語としている。分析では，どちらの言語でも，非母語話者が言葉探しで一度自らの母語で発音した際，相手の言語の発音で修復を行う現象を指摘している。本研究では，細田（2008）に従い，英語やカタカナ英語の使用頻度とその事例进行分析する。

次に，伊集院（2004）は，日本語の母語場面と接触場面の初対面会話におけるスピーチスタイルの出現頻度とその特徴を分析している。分析では，①ダ体の使用，②デス・マス体の使用，③中途終了型の使用に分類し，これらの出現率をポライトネス理論から考察している。分析の結果，母語場面では②デス・マス体から徐々に①ダ体へとシフトする共通の傾向が見られるが，接触場面では②から①への急激なシフトや①への偏りが見られる一方で，一定の傾向が確認できないこともあったと指摘している。これは，会話相手が非母語話者であるという認識により，丁寧に話すという規範意識の希薄化，ダ体が分かりやすいというステレオタイプ，ダ体を使用した学習者に対する言語的収束がシフトの要因として考えられるとしている（伊集院 2004:20-21）。本研究では，学習者同士の親疎関係は異なるが，ビジターとは基本的

に初対面であり，日本語授業という状況からも基本的にデス・マス体基調である。しかし，2つのスタイルの混在も観察されているため，分析では，伊集院（2004）に従ってスタイルの分類を行い，その事例を分析する。

3 調査の概要

分析対象は，TUIJ の日本語専攻の最終学年の学生を対象とするレポートライティングの授業である（2023 年度，週 2 回全 25 回，各 90 分）。本授業では，受講生（9 名，中級-中上級）が各自の研究課題について文献調査を行い，2 回のビジターセッションに参加し，最終的に 8～10 ページのレポートを執筆する。書き言葉のスキル向上，論文作成能力，思考力，問題の分析・解決能力の養成が目的である。表 1 は，授業回全体の流れである。ビジターセッション 1（第 9 回）は研究課題についてビジターにインタビュー，ビジターセッション 2（第 18 回）は研究成果の中間発表・意見交換を行った。

表 1：授業回全体の流れ

授業	内容
1-8	オリエンテーション，ライティング活動，インタビュー準備
9	ビジターセッション 1（研究課題についてビジターにインタビュー）
10-17	インタビュー結果を踏まえた指導，発表準備
18	ビジターセッション 2（研究成果の中間発表・意見交換）
19-20	発表・意見交換会を踏まえた指導，レポート執筆活動
21-23	レポート初稿提出，期末レポート発表
24	レポート初稿を踏まえた指導
25	レポート最終稿提出

ビジターセッション 2 では，受講生（F）9 人とビジター（J）12 人の混合グループ（2～5 名）を作った（2023 年 11 月，90 分，録音録画）。そして，F の発表と質疑応答で 20 分程度とし，グループのメンバーを入れ替えて 3 回実施した。各回では，発表や質疑応答に続けて発表に関連する雑談も見られたため，分析では「発表・質疑応答・関連する雑談」の 3 種類に談話を分けた。このうち，録音録画が明確な 7 つの談話を分析対象とした。よって，分析対象の談話に参加していない者もいる。表 2 は，各談話（談）の概要で，発表者，聞き手，F の研究課題，談話の種類とその所要時間のまとめである。発表者の記号後の数字は発表回数を示し，「F1-1」は F1 の 1 回目の発表を意味する。質疑応答（質応）は，簡易な質問で早く終わる場合（談話

1, 4, 5), 教員の全体アナウンスにより省略される場合 (談話 6) もあった。雑談は談話 7 のみ出現した。なお, 収録は調査者 4 名で行ったが, 1 名は授業担当者 (T) として授業運営を行い, 3 名は収録と観察を行った。

表 2: 7 つの談話の概要

	発表者	聞き手	F の研究課題	談話の種類	所要時間
談 1	F1-1	F2,J1,J2,J3	日本のジェンダー不平等	発表・質応	10 分 2 秒
談 2	F2-1	F1,J1,J2,J3	ポケモン GO の影響	発表・質応	9 分 2 秒
談 3	F3-1	F1,J4,J5,J6	キャラクターグッズと消費行動	発表・質応	9 分 30 秒
談 4	F1-2	F3,J4,J5,J6	日本のジェンダー不平等	発表・質応	8 分 13 秒
談 5	F2-2	F4,J7,J8,J9	ポケモン GO の影響	発表・質応	6 分 13 秒
談 6	F4-2	F2,J7,J8,J9	日本の移民受け入れ	発表	11 分 57 秒
談 7	F2-3	J11	ポケモン GO の影響	発表・質応・雑談	24 分 43 秒

4 分析

4.1 日本語基調の談話における英語使用

表 3 は, 細田 (2008) に従い, 発話者の発音により, 3 つの談話別に (1)F による英語 (F 英), (2)F によるカタカナ英語 (F カ), (3)J による英語 (J 英) に分類した結果である。合計の下段は, 小計を分母に % を算出した。

表 3: 談話別の英語の出現

	発表				質疑応答				雑談			
	(1) F 英	(2) F カ	(3) J 英	小計	(1) F 英	(2) F カ	(3) J 英	小計	(1) F 英	(2) F カ	(3) J 英	小計
談 1	9	14	0	23	3	1	0	4	—	—	—	—
談 2	0	22	1	23	2	20	0	22	—	—	—	—
談 3	0	27	0	27	3	19	0	22	—	—	—	—
談 4	7	19	1	27	0	2	0	2	—	—	—	—
談 5	0	20	0	20	1	7	0	8	—	—	—	—
談 6	0	1	0	1	—	—	—	—	—	—	—	—
談 7	0	20	0	20	0	34	10	44	8	19	20	47
合計	16	123	2	141	9	83	10	102	8	19	20	47
%	11.3	87.2	1.4	100	8.8	81.4	9.8	100	17.0	40.4	42.6	100

表 3 より, まず, 発表と質疑応答では (2)F カが多いことがわかる。具体的には, 発表で 123 (87.2%), 質疑応答で 83 (81.4%) と, 80% を超える。日本語で話す場面だという認識が参加者間に共有されていたと考えられる。逆に, これらの談話でも, (1)F 英と (3)J 英の使用があったこともわかる。次に, 談話 7 の雑談で (1)F 英と (3)J 英が多いことがわかる。発表では (1)F 英と (3)J 英はともに 0, 質疑応答では (1)F 英 0, (3)J 英 10 であるのに対し, 雑談では (1)F 英 8 と (3)J 英 20 である。以上の 2 点を踏まえ, 基本的にはカタカナ英語であるが, (1)(3)の英語使用となった要因を会話例から検討する。

例1では、F3が、仲のいい発表者F1に対して発表直前に向けた励ましで英語を使用する。F3は最初に順番を促す発話を日本語で述べ(1F3)、F1が躊躇する様子を見て、英語の口語表現「slay queen」と励ます(3F3)。受け手との親疎関係で英語使用となり、発話で受け手が特定されている。なお、以下、会話例の下線部は該当の発話である。発話者不明の場合はxとする。

例1 親疎関係によるFからFに向けた(1)F英(談話5発表)

1 F3	じゃぜひどうぞF1さん
2 F1	あーん、うーん
3 F3	<u>Slay, F1, slay queen</u>

例2は、質疑応答で、データ収集の方法を質問されたF2が、秋葉原で実際にポケモンGOをしている人に声を掛けたと説明した上で、それを「事故」(1F2)と言った後に、英語で言い換える(5F2)。英語と等価の日本語の表現がなく、言いたいことを表現するために英語を使用したと考えられる。

例2 言語能力の補完によるFから聞き手全体に向けた(1)F英(談話2質疑応答)

1 F2	えーとまあ、なんという、えー事故↑(笑)でした (略)
4 J3	んー
5 F2	<u>Total accident</u> (笑)
6 Jx	あー

例3は、発表開始時にJ3が発表者F2に順番を促して「Next」(4J3)と英語を使用する。Fには日本語でも理解できる表現であり、J3がF2の外来性を留意して英語を使用したと考えられる。

例3 外来性の留意によるJからFに向けた(3)J英(談話2発表)

1 F1	(略) ありがとうございます
2 F2	はい
3 J3	お疲れ様です
4 J3	<u>Next</u>
5 F2	はい、難しすぎる

例4は、雑談でF2が出身地の説明をすると、J11が自分の出身地について「Me, too」(3J11)と英語で類似性を示す。雑談で司会進行の必要のない点は例3と異なるが、Fも日本語で理解可能である。JのF2に対する外来性の留意や話題の共通性による親しみが、英語使用に繋がったと考えられる。

例4 外来性の留意と親しみによるJからFに向けた(3)J英(談話7雑談)

1 F2	えーとま、庭園の州でーす(笑) だからたくさん、えーと、牛とか、ま、んー[野菜、そう、そういうことたくさんあります、ニュージャージーで
2 J11	[あー
3 J11	えー <u>Me, too</u>
4 F2	(笑) ほんとですか

4.2 スタイルシフト

FとJの発話のスタイルを、伊集院（2004）に従い、(1)デス・マス体、(2)ダ体、(3)中途終了に分類・集計した。さらに、(4)あいづち的な発話（杉戸1987）は対象外、(5)聞き取り不能発話は不明として集計した。

4.2.1 発表におけるスタイルシフト

表4は、発表における発話数、(1)～(5)の集計結果である。表中の%は各談話の発話数の合計を分母に算出した（後述の表5、6も同様）。発表は、基本的にFがデス・マス体であるが、(2)ダ体、(3)中途終了が(1)デス・マス体より高い談話がある。具体的には、談話1のF、談話4のF、J、談話6のJの(2)ダ体が高い。談話4では、Jの(3)中途終了も高い。

表4：発表におけるスタイルの集計

		発話数			(1)デ・ス・マス体		(2)ダ体		(3)中途終了		(4)対象外		(5)不明	
談 1	J	76	13	17.1%	0	0.0%	1	1.3%	3	3.9%	9	11.8%	0	0.0%
	F		63	82.9%	13	17.1%	19	25.0%	7	9.2%	12	15.8%	12	15.8%
談 2	J	39	5	12.8%	0	0.0%	1	2.6%	0	0.0%	4	10.3%	0	0.0%
	F		34	87.2%	26	66.7%	7	17.9%	0	0.0%	1	2.6%	0	0.0%
談 3	J	64	20	31.3%	4	6.3%	3	4.7%	0	0.0%	13	20.3%	0	0.0%
	F		44	68.8%	23	35.9%	15	23.4%	2	3.1%	1	1.6%	3	7.7%
談 4	J	110	45	40.9%	2	1.8%	19	17.3%	11	10.0%	13	11.8%	0	0.0%
	F		65	59.1%	19	17.3%	31	28.2%	6	5.5%	8	7.3%	1	0.9%
談 5	J	24	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	F		24	100%	19	79.2%	2	8.3%	1	4.2%	0	0.0%	2	8.3%
談 6	J	60	27	45.0%	5	8.3%	13	21.7%	4	6.7%	0	0.0%	5	8.3%
	F		33	55.0%	17	28.3%	4	6.7%	0	0.0%	7	11.7%	5	8.3%
談 7	J	31	4	12.9%	0	0.0%	2	6.5%	0	0.0%	2	6.5%	0	0.0%
	F		27	87.1%	21	67.7%	1	3.2%	0	0.0%	0	0.0%	5	16.1%
小計	J	404	114	28.2%	11	2.7%	39	9.7%	18	4.5%	41	10.1%	5	1.2%
	F		290	71.8%	138	34.2%	79	19.6%	16	4.0%	29	7.2%	28	6.9%
合計		404	404	100%	149	36.9%	118	29.2%	34	8.4%	70	17.3%	33	8.2%

例5は、Fの(2)ダ体の例である。F3は、デス・マス体で調査対象者2人の説明を行うが、その2人が実は友人だという従属的な情報を発話する際、ダ体となる（6F3）。F、Jともに、例5のように従属的な情報の発話で、(2)ダ体、(3)中途終了となる発話が観察された。

例5 Fの従属的な情報の発話のダ体（談話3発表）

1 F3	(略) Aさんは日本人の18歳ーじょ日本人女性でなんか○大学に行っています
2 F3	でBさんは日本人で、なんか22歳ーの女性で、なんか○○ーの社員です
3 J4	[へー
4 J5	[へー
5 J6	[へー
6 F3	うん、まあ私の友達、2人とも（笑）／うん
7 Jx	／（笑）

8 F3 んーで、やっぱり質問内容はこれです

次に、(2)ダ体や(3)中途終了の比率が高い談話（表 4）では、発表者や T が J に問いかけを行い、J 同士のやり取りとなって(2)ダ体、(3)中途終了が出現する傾向があった。例 6 は、T が J に意見を求め（2T, 10T）、F4 のダ体による共感（3F4）の後、J 同士のダ体による意見交換（8J6, 9J4, 11J4, 12J6）があり、それが全体として F4 への回答になっている。

例 6 日本人同士のやり取りのダ体（談話 4 発表）

1 F4	(略) あのアメリカで、なんか教養と、あの、お子さまの育てるは一番大きい義務だと思いますけど、日本と比べてちょっと違います
2 T	うーん、みなさん、どう思います↑これについて
	(略)
7 F4	うん、難しいよね
8 J6	えー、何だろう
9 J4	でもなんか確かに家事は女の人がやるみたいなイメージが
10 T	イメージはあります↑今も↑
11 J4	うーん、いや、今はないけど
12 J6	今はない（笑）

4.2.2 質疑応答におけるスタイルシフト

次に、表 5 は、質疑応答における発話数、(1)～(5)の集計結果である。質疑応答は、(2)ダ体が、(1)デス・マス体より高い談話がある。具体的には、談話 2, 3 の F と J, 談話 7 の J において特に実数と比率が高い。

表 5：質疑応答におけるスタイルの集計

		発話数		(1)デス・マス体		(2)ダ体		(3)中途終了		(4)対象外		(5)不明	
談 1	J	21	6 28.6%	1 4.8%	2 9.5%	0 0.0%	3 14.3%	0 0.0%					
	F		15 71.4%	4 19.0%	5 23.8%	2 9.5%	3 14.3%	1 0.7%					
談 2	J	139	61 43.9%	1 0.7%	28 20.1%	3 2.2%	27 19.4%	2 1.4%					
	F		78 56.1%	24 17.3%	29 20.9%	7 5.0%	18 12.9%	0 0.0%					
談 3	J	134	84 62.7%	1 0.7%	42 31.3%	7 5.2%	33 24.6%	1 0.7%					
	F		50 37.3%	2 1.5%	33 24.6%	5 3.7%	9 6.7%	1 0.7%					
談 4	J	13	7 53.8%	1 7.7%	4 30.8%	1 7.7%	1 7.7%	0 0.0%					
	F		6 46.2%	1 7.7%	4 30.8%	1 7.7%	0 0.0%	0 0.0%					
談 5	J	18	4 22.2%	2 11.1%	0 0.0%	1 5.6%	0 0.0%	1 5.6%					
	F		14 77.8%	12 66.7%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.6%	1 5.6%					
談 7	J	258	148 57.4%	28 10.9%	44 17.1%	24 9.3%	49 19.0%	3 1.2%					
	F		110 42.6%	45 17.4%	8 3.1%	3 1.2%	51 19.8%	3 1.2%					
小計	J	583	310 53.2%	34 5.8%	120 20.6%	36 6.2%	113 19.4%	7 1.2%					
	F		273 46.8%	88 15.1%	79 13.6%	18 3.1%	82 14.1%	6 1.0%					
合計		583	583 100%	122 20.9%	199 34.1%	54 9.3%	195 33.4%	13 2.2%					

例 7 は、談話 2 で、F2 の研究課題のポケモン GO をいつ行うのかと F1 が質問し、F2 の回答に（9F2, 11F2）中途終了、F1 の質問（3F1, 7F1）、F1 と J の評価的な発話（12F1, 14J3, 15F1, 17F1, 19F1）にダ体が使用され、F1 にはカタカナ英語の使用もある（12F1, 17F1）。発表者 F にビジ

ターJが質問するという固定的なやり取りではなく、FもJも聞き手として積極的に意見交換に参加する際に、参加者間にダ体の使用が頻繁になる傾向がある。

例 7 J/Fの積極的な意見交換に伴うダ体の出現（談話 2 質疑応答）

1	F2	私も、えっと、夫も、え、夫とえー毎日しています、ポケモン GO
2	Jx	えー
3	F1	<u>いつ頃、なんか夜</u>
4	F2	ん↑
5	F1	<u>夜で、散歩して、いつ</u>
6	F2	あー
7	F1	<u>うーん、まあ、週末の一、んー</u>
8	Jx	んー
9	F2	<u>うーん、ま週末の昼と</u>
10	F1	あー
11	F2	<u>うんうんまー学校の後に（笑）</u>
12	F1	<u>ナイスー</u>
13	Jx	んー
14	J3	<u>いい運動だ</u>
15	F1	<u>ね、運動</u>
16	Jx	（笑）
17	F1	<u>ナイス</u>
18	F2	んー
19	F1	僕は、そう、あまり散歩しない（笑）うわ
20	F2	ま私のアパートからえーと渋谷までに、えーと、散歩することもあります

4.2.3 雑談におけるスタイルシフト

最後に、表 6 は、談話 7 の雑談における発話数、(1)～(5)の集計結果である。雑談では、F・Jともに(2)ダ体の値が高い。Jは評価的な発話や独話的な発話、Fは従属的な発話で、(2)ダ体が出現する傾向が観察された。

表 6：雑談におけるスタイルの集計

		発話数		(1)デス・マス体		(2)ダ体		(3)中途終了		(4)対象外		(5)不明	
談 7	J	179	80 44.7%	1	0.6%	56	31.3%	1	0.6%	20	11.2%	2	1.1%
	F	179	99 55.3%	23	12.8%	41	22.9%	10	5.6%	23	12.8%	2	1.1%
合計		179	179 100%	24	13.4%	97	54.2%	11	6.1%	43	24.0%	4	2.2%

談話 7 は、F2 と J11 の 2 人で、F2 の研究課題のポケモン GO が J11 と共通の趣味であると判明し、発表や質疑応答時の緊張がほぐれた様子であった。F2 は比較的デス・マス体を使用する傾向にあるが（例 7，20F2），例 8 では、出身地の質問以降は 2 人ともダ体となる。J に英語使用も観察されるが、例 3・4 同様に日本語で理解可能な表現である。F2 は、J11 のジャージー牛乳の連想と思われる発話（6J11，8J11）に上昇調で驚き（7F2）を表しつつ、ダ体を維持して J11 の発話内容をやんわり否定し（9F2，11F2），出身地

の説明を行う（12F2）。F2 のダ体へのシフトの要因は，J11 の F2 の出身地への関心に対する親近感，唐突な連想に対する驚き，想定外の説明で日本語が断片的になった等の可能性が考えられるが，結果的に 2 人ともダ体となり，親近感が観察されるやり取りとなる。

例 8 F と J のダ体のやり取り（談話 7 雑談）

1 J11	何州，出身なんですか
2 F2	<u>ううん，えっとアメリカのニュージャージー州</u>
3 J11	<u>ニュージャージー</u> ，（拍手） <u>I know</u>
4 F2	はい
5 F2	<u>ニューヨークの近い</u> （笑）
6 J11	<u>ニュージャージーって牛乳有名なところ</u> ↑
7 F2	ん ↑
8 J11	<u>牛乳が有名</u> ↑
9 F2	<u>有名</u> ，[えー
10 J11	[milk, milk
11 F2	<u>んーあーあんまりー有名じゃないーかなー</u>
12 F2	<u>[ニュージャージーのーんートマトとか</u>
13 J11	[ぎゅー
14 J11	<u>トマトなんだ</u>

5 考察と結論

本研究では，日本における米国大学の日本語授業のビジターセッションを対象に英語使用とスタイルシフトを分析し，その揺れ動く様相を量的に把握するとともに，事例を通して検証した。この結果以下の知見が得られた。

まず，英語使用に関しては，日本語授業のビジターセッションであることから断片的な英語使用であった（表 2）。F は日本語での表現が困難な場合，英語母語話者の友人が受け手の場合等に英語使用が観察された（例 1，2，8）。一方，J は，F が日本語で理解可能であっても英語を使用しており（例 3，4，8），受け手が英語母語話者であるという外来性を留意し，話題や相手に対する親近感から英語を使用した可能性がある。これに対し，F の場合は言語能力の補完として必然性が高い点で，J の英語使用とは異なる。

次に，スタイルシフトに関しては，発表は基本的にデス・マス体だが（表 4），質疑応答や雑談での従属的な発話（例 5），回答の発話や評価的発話でダ体や中途終了の値が高くなる傾向が観察された（例 7，8）。つまり，談話の種類によりスタイルを使い分けていると考えられる。発表でも，F や T からの問いかけで質疑応答と類似のやり取りが生じると，ダ体や中途終了が選

扱されていた（例 6）。同時にカタカナ英語や英語使用も断片的に観察された（例 7, 8）。

つまり、F と J は各自が持つ言語レパートリーを駆使し、ビジターセッションという学びの場に参加しているといえる。その言語使用は、基本的には日本語のデス・マス体基調であるが、決して固定されてはいない。意見交換というビジターセッションの目的のもと、F と J 双方が、発話の宛先、話題、親しみ、談話の種類、言語運用能力等を要因として TL を実践していたと考えられる。今後の課題としては、教育実践への応用と研究の深化が挙げられる。教育面では、質疑応答の活性化を促す授業をデザインし、参加者が各自の言語レパートリーを活用して研究課題の内容を深く学び合う活動に繋げたい。研究面では、英語使用とスタイルシフトの発話連鎖をさらに質的に検討することが挙げられる。会話例には両者が同時に出現しており、両者の影響とその発話連鎖、さらに授業全体における機能について、授業デザインと照らし合わせて検討する必要がある。

<文字化の規則>

]	同時発話	↑	上昇イントネーション	/	発話等の挿入
()	非言語行動等	,	ごく短いポーズ		

<謝辞>

本研究は、松橋由佳（テンプル大学ジャパンキャンパス）、竹田らら（東洋大学）と共同で行った。本稿は、JSPS 科研費 23K00704 「日米大学隣接環境での複数言語使用の実態分析：語学教育への応用を目指して」（代表者：竹田らら）、昭和女子大学 2024 年度海外学会発表支援助成金の助成を受けたものである。

<引用文献>

伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い

分け：母語場面と接触場面の相違」『社会言語科学』6(2), 12-26.

酒井優子（2022）『協働的対話における学習者の母語使用とその役割：社会

- 文化理論とバイリンガル・アプローチの視点から』[未公開博士論文].
北海道大学.
- 杉戸清樹 (1987)「発話のうけつぎ」国立国語研究所編『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相－座談会資料の分析』三省堂, 68-106.
- 佐野愛子 (2024 年 8 月 6 日－9 日)「はじめての Translanguaging」[パネルセッション]. 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会 2024 年度研究大会. オンライン.
- 抽冬紘和 (2020)「異文化間グループ相互行為における Communicative competence としての Translanguaging」『日本語用論学会第 22 回大会発表論文集』, pp.243-246, 日本語用論学会.
- 細田由利 (2008)「「第二言語で話す」ということ : カタカナ英語の使用をめぐる」『社会言語科学』10(2), 146-157.
- 村岡英裕 (2020)「日本における外国人移住者の言語レパトリーの多様性－多様性はどのような管理から生まれどこに向かっているか－」『外国につながる人々と多言語社会 接触場面の言語管理研究 vol.17』, pp.52-72, 千葉大学大学院人文公共学府.
- Baker, C. (2011). *Foundation of bilingual education and bilingualism* (5th ed.). Bristol: Multilingual Matters.
- Canagarajah, S. (2011). Translanguaging in the classroom: Emerging issues for research and pedagogy. *Applied linguistics review*, 2, 1-27.
- Gumperz, J. (1964). Linguistic and social interaction in two countries. *American Anthropologist*, 66(6), 137-154.
- Li, W. (2022). Translanguaging as a political stance: Implications for English language education. *ELT Journal*, 76(2), 172-182.
- Tsou, W. (2021). Translanguaging as a glocalized strategy for EMI in Asia. In W. Tsou, & W. Baker (Eds.) *English-medium instruction translanguaging practices in Asia: Theories, frameworks and implementation in higher education*. (pp. 3-17). Singapore: Springer.